

## ワークショップ概要

9 月 6 日（金） 14:30～16:30 （WS1～WS4）

9 月 8 日（日） 9:30～11:30 （WS5）

※ 各教室の収容定員およびワークショップ実施内容により、参加者数を制限させていただく場合があります。原則として初年次教育学会会員の参加者を優先します。

WS1	モデル授業公開検討会（4）：テキストの読み方
教室	B401（会場の収容定員に基づく定員の目安 80 名）
担当者	藤田哲也（法政大学）、中川華林（流通経済大学）
概要	<p>本ワークショップでは、担当者(中川)が実際に初年次教育の模擬授業を行い、授業後に参加者の皆様と授業内容や授業運営上の工夫等について意見交換をする。</p> <p>今年度のテーマである「テキスト」とは、教科書だけでなく、レポート課題を作成するときに参照する図書や専門課程に進んで読む論文も含む、説明文全般を指す。状況として「レポートを作成するために資料となる図書を読む」場面を想定し、いかにして「読まずに」読むべき図書を取捨選択するのかについて説明するとともに、「読解の困難」を生じさせる原因について心理学の知見に基づいた解説をする予定である。また、著者の主張を的確に読み取るためには文章の構造を見抜くことが有用であることを説明した上で、それらの構造を自分が文章を書くときにも活用する価値があることを実感できるようなワークを取り入れる予定である。</p> <p>本ワークショップでは導入部分を藤田が解説し、続く「模擬授業(中川が担当)」の中で学生が今後テキストを読む際に留意すべき点を体得できるような工夫を実践する。ワークショップ後半では、学生に対するアドバイスの在り方について、参加者の皆様と討論する予定である。参加者の皆様には、前半は学生の視点で授業を受けていただきたく、原則遅刻せずに参加するようお願いしたい。後半の冒頭では、指定討論者(中川)から提示される、授業をよりよくするため論点について全参加者で意見交換をした後、自由な質疑応答も行う予定である。</p>
キーワード	初年次教育モデル授業、授業検討会、気づき、シラバス

WS2	<p>学生の経験を言語化し、学びを深めるライティング指導</p> <p>—TAE(Thinking At the Edge)をベースにした「経験をことば化する方法」—</p>
教室	B402（会場の収容定員に基づく定員の目安 60 名）
担当者	成田秀夫（大正大学）、山本啓一（北陸大学）、得丸智子（開智国際大学）
概要	<p>アクティブラーニングが広がり、学生が発信する機会が増えているが、情報を検索して「再発信」するだけに陥ってはいないだろうか。真に発信の「主体」として、学生自身の経験に根ざした思考の発信を促すべきだろう。このような問題意識のもと、私たちの研究グループは、経験から得た知恵（身体知、暗黙知）をことばで表現する方法（「経験のことば化」と呼ぶ）を模索してきた。今回は、哲学者ジェンドリンが創始し、得丸（2008 他）が表現活動としてデザインした TAE（Thinking At the Edge）をベースに、初年次教育で実施可能な「経験をことば化する方法」を紹介する。この特徴を要約すると、次のようになる。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・内省を促し、思考力と表現力を一体のものとして高める</li> <li>・経験を相対化し意味づける文章表現へと、段階的・系統的にプロセスをデザインする</li> <li>・他者との共有や、アカデミック・ライティングへの接続に開かれている</li> </ul> <p>本ワークショップでは、時間が許す限り、「記憶の断片を小カードに書き取り広げて俯瞰する（データ化）→小カードを類似性によりグループにする（グループ化）→グループ内類似性、グループ間関連性を短く表現する（パターン化）→キーワードを選定し主張の核心を論理的に表現する（構造化）」という一連の手順を体験してもらいたいと考えている。</p>
キーワード	TAE、経験の言語化、アカデミック・ライティング

WS3	大教室で教えるための準備
教室	B404（会場の収容定員に基づく定員の目安 80 名）
担当者	田中岳(東京工業大学)、宮浦崇(九州工業大学)、立石慎治(国立教育政策研究所)
概要	<p>「教員による一方向的な講義形式の教育とは異なり、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた」(文部科学省) ことで、グループ活動を前提とした授業が増えているのではないのでしょうか。確かに、知識伝達(ダウンロード)型の講義よりも、学生の能動性を引き出すグループ活動は、教員にとっても当の学生にとっても「アクティブ・ラーニング」を行った達成感があるものです。</p> <p>とはいえ、大教室における講義形式の授業が、その役目を終えたのかといえ、そうともいえません。講義形式が相応しい場合もあるからです。教育方法として、あるいは科目の配置として仕方ないといったケースが現場で起きていることでしょうか。</p> <p>では、それらの授業が従前のまま(講義だからやむを得ない)で良いのでしょうか。大教室の講義形式では、授業(テーマ)に対する学生個々の関わり、グループ活動のような学生間の交流や自身と向き合う省察といった活動は、難しいままなののでしょうか。</p> <p>本ワークショップでは、経験豊富な先生、大規模クラスを教えるのが初めての先生、支援策を検討したい職員などの方々に集まっていただき、大教室で教えることに関する知恵を探し出すことを目指します。</p> <p><b>※注:本WSでは「大教室, 大規模クラス」を、履修学生数のみではなく、個々の学生が学習者として他の学生と交流することが難しくなる状況・環境としても捉えています。</b></p> <p>[目標] ワークショップ終了後には、参加の皆さんが、それぞれ課題解決への道筋を自身の言葉で語るようになる。[役割] 担当者は会場の相互作用を活性化する進行に努めますので、参加の皆さんには主体的な活動をお願いいたします。[過程] ミニレクチャーとダイアログという対話方法を織り交ぜながら、各参加者が省察する場を設け、最後に会場全体での共有までを計画しています。</p>
キーワード	講義, 大教室, 大規模クラス, 教授法, 学習者, アクティブ・ラーニング

WS4	初年次でこそ育てたい「問い」をつくる力： QFT を体験しよう
教室	B303（会場の収容定員及び活動内容に基づく定員の目安 30 名）
担当者	佐藤広子（創価大学）
概要	<p>AI 時代を迎え、正解を求める力から、そもそも解を必要とする「問い」自体を創る力が求められている。かつて、刈谷剛彦（1996）が『複眼的思考法』において指摘しているように、正解主義が日本の学生の思考を制約している。正解を知らないから分からない、分からないのは勉強不足で、もっと勉強すれば（正解と思われる知識を吸収すれば）問題が解けるようになり、それが勉強するということだと信じて疑わない学生は少なくない。しかしながら、正解のない時代と言われる今日、正解探しの能力だけでは不十分である。自ら問いを立て、問いから生まれる課題を解決するために AI を活用する、といった価値ある問づくりの力こそ、大学卒業までに磨いておきたいコンピテンシーの一つである。</p> <p>本ワークショップでは、近年注目が集まる「問づくり」の手法 QFT の体験的理解を目指す。背景にある理論や QFT を用いたコース設計など、発展的な内容を扱うには時間的に無理があるが、QFT を体験し、その導入・指導方法を学ぶには 2 時間という枠は無理がない。初年次のレポート作成におけるテーマ設定の指導など、良質な問いを必要とする科目や学習課題にかかわる方の参加を期待している。ただし、ワークショップの性格上、定員の目安は 30 名とする。</p>
キーワード	問う力、QFT、レポート作成、テーマ設定

WS5	演劇的手法によるコミュニケーション環境のデザイン
教室	B303 (会場の収容定員および活動内容に基づく定員の目安 36名)
担当者	安永悟 (久留米大学)、蓮行 (劇団衛星/大阪大学)、鮫島輝美 (京都光華女子大学)
概要	<p>演劇は、複数分野の芸術の混交により創造される総合芸術である。「場と情報と身体 of 芸術」と言うこともできる。演劇的手法を授業に取り入れることで、学習者の活動性を高め、授業しやすい環境ができるだけでなく、属性や専門性の異なる学習者同士が、それらの「差異」を超えていかに集合知をつくるか、という合意形成のプロセスを学習者に体験させることができる。そのプロセスは「コミュニケーション環境のデザイン」のプロセスと言い換えることもできる。</p> <p>発表者はこれまで10数年に渡り、大学における演劇教育を実践してきた。初年次教育の取り組みとしては、現在、看護師養成課程や教員養成課程の他、留学生を主な対象とした授業に演劇的手法を導入している。授業では、身体表現を伴うワークや、学習者をグループに分けてのロールプレイ、短時間の演劇創作などを行う。段階を踏んで授業を進めることで、まずは学習者同士が仲良くなりグループワークが活発に進むようになる。さらに、あるテーマについてロールプレイや演劇創作をすることで、学習者同士が「自分はこう考えている」「この点が問題じゃないか？」など、具体的なイメージを伴って議論できるようになる。</p> <p>今回の2時間のワークショップでは、発表者がこれまで取り組んできた演劇的手法の事例を紹介すると同時に、実際に演劇的手法を用いたワークを参加者に体験してもらう。さらに、演劇的手法を初年次教育にいかに応用するか、そして、その実践をいかに評価するかについて全体でディスカッションを行い、新たな集合知を創出したい。</p>
キーワード	演劇的手法、看護教育、教師教育、異文化交流、集合知